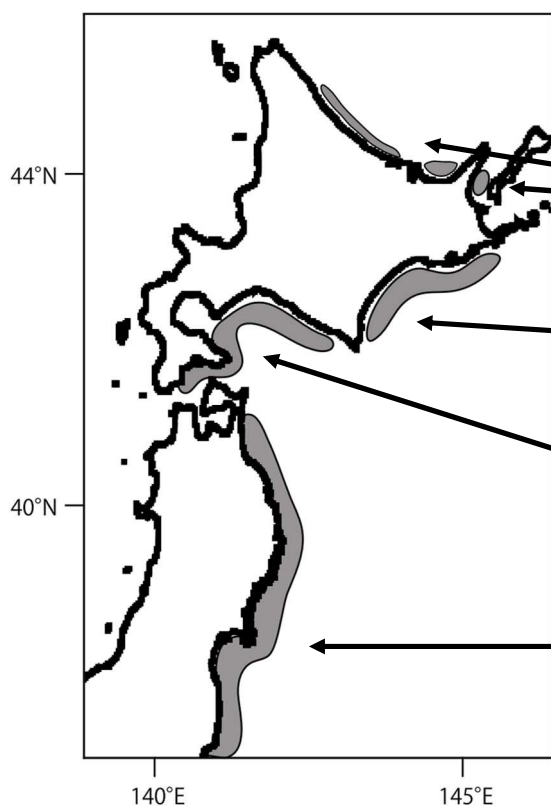




2019年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
中央水産研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し（2019年10月～12月）のポイント



スルメイカの来遊量は、根室海峡～オホーツク海では前年を上回り、常磐～三陸海域および道東太平洋海域では前年並、津軽海峡～道南太平洋海域では前年を下回る。

根室海峡～オホーツク海：
来遊量は低水準ながら前年を上回る。
魚体は前年より小さい。

道東太平洋海域：
来遊量は前年並に少ない。
魚体は前年より小さい。

津軽海峡～道南太平洋海域：
来遊量は前年を下回る。
魚体は前年より小さい。

常磐～三陸海域：
来遊量は前年並。
魚体は前年より小さい。

問い合わせ先

国立研究開発法人水産研究・教育機構 中央水産研究所

担当：業務推進部 銭谷、木村

資源研究センター 西田、岡本

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

2019年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2019年10月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海、津軽海峡～道南太平洋海域、常磐～三陸海域

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網

対象魚群：主に冬季発生系群（2019年級群）

1. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

- (1) 来遊量：前年並に少ない。
- (2) 漁期・漁場：前年同様に漁場形成は散発的、明瞭な主漁期は無い。
- (3) 魚体：前年より小さい。

2. 根室海峡～オホーツク海（いか釣り、定置網、底びき網）

- (1) 来遊量：低水準ながら前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：明瞭な主漁期は無い。
- (3) 魚体：前年より小さい。

3. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年より小さい。

4. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量：前年並。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年より小さい。

I 予報の説明

2019年8月～9月に実施した漁場一斉調査とイカ類南下期資源調査*の結果（以降、いか釣り調査と総称する）、および7月～8月（一部9月を含む）の漁況経過を主要な情報として太平洋における10月～12月のスルメイカの来遊量を予測した。その結果、以下の通り、根室海峡～オホーツク海では前年を上回り、常磐～三陸海域および道東太平洋海域では前年並、津軽海峡～道南太平洋海域では前年を下回ると予測される。

*北海道立総合研究機構釧路水産試験場が独自に実施。

1. 道東太平洋海域

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。道東周辺海域（42°N以北、143°E以东）でのいか釣り調査による平均CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は前年を下回った。道東主要港における初水揚げは前年よりも早く、8月の水揚げ量は前年を上回ったものの、低い水準で推移している（表1）。9月以降の上旬までの水揚げ量も前年を上回っているものの、依然としてその水準は低く、近年5年（2014年～2018年）平均を大きく下回っている。以上のことから、道東太平洋海域への来遊量は前年並に低い水準になると予測される。そのため、漁場形成は前年同様に散発的になり、明瞭な主漁期が無いままに終了すると予測される。魚体サイズは、いか釣り調査の結果から前年より小さい個体が主体になると考えられる。

2. 根室海峡～オホーツク海域

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。釧路以东（144.4°E以东）でのいか釣り調査によるCPUEは前年並であった。国後島および択捉島周辺の太平洋側の沿岸域における9月中旬までの平均海表面水温*、およびそれ以降10月までの予測水温**（図1）には例年よりも高いところも確認されるため、スルメイカが太平洋からオホーツク海への回遊を妨げる環境ではないと考えられる。9月の羅臼港への水揚げ量は、水準は低いが、9月17日時点で既に前年同月を上回っている（表1）。以上のことから、根室海峡～オホーツク海域への来遊量は、水準は低いものの前年は上回ると予測される。ただし、明瞭な主漁期は無いままに終了すると予測される。魚体サイズは、いか釣り調査による釧路以东での結果から前年より小さい個体が主体になると考えられる。

*気象庁の札幌管区気象台が公表している日別海域平均海面水温（<https://www.data.jma.go.jp/gmd/kaiyou/data/db/kaiyo/series/engan/engan124.html>）

**国立研究開発法人水産研究・教育機構により開発され、2012年5月より運用を開始した海況予測システム（FRA-ROMS）による予測水温

3. 津軽海峡～道南太平洋海域

この海域の漁獲対象資源は、津軽海峡～道南太平洋海域に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えられる。津軽海峡～道南太平洋周辺海域（41°N以北、143°E以西）におけるいか釣り調査のCPUEは前年を下回った。大畑港での8月の小型いか釣り船CPUE（1日1隻当たり水揚げ量）は前年並であったが、函館港と浦河港では前年を下回った（表1）。浦河港では、9月17日時点でも初水揚げがない。当該海域主要港での全漁法*による8月の水揚げ量は前年を大きく下回った。また、前述の通り、道東太平洋海域への来遊量は前年並に低い水準になると予測されている。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋周辺海域への来遊量は前年を下回ると予測される。魚体サイズは、いか釣り調査の結果から前年より小さい個体が主体になると考

えられる。

*いか釣り、定置網、底びき網

4. 常磐～三陸海域

この海域の漁獲対象資源は、常磐～三陸海域に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えられる。三陸周辺海域（41° N以南、143° E以西）におけるいか釣り調査による漁獲は無く、CPUEは前年を下回った。青森県主要港での8月の小型いか釣り船CPUEは前年を上回ったが、岩手県主要港では前年並、宮城県主要港では前年を下回った（表1）。当該海域主要港での全漁法*による8月の水揚げ量は前年を上回ったものの、そのうちの8割以上を占めた八戸港における9月上旬の水揚げ量は前年を下回っていた。以上のことから、常磐～三陸海域に分布する群は前年並と考えられる。また、前述の通り、道東太平洋海域への来遊量は前年並に低い水準になると予測されている。したがって、常磐～三陸周辺海域への来遊量は前年並と予測される。本年のいか釣り調査では同海域で漁獲が無かったため、魚体サイズの比較には道東太平洋海域での結果を利用した。その結果、10月以降は前年より小さい個体が主体になると考えられる。

*いか釣り、定置網、底びき網、まき網

II 調査結果

8月～9月に実施されたいか釣り調査の結果（図2）、調査海域全体の平均CPUEは0.16尾で、前年（0.99尾）を下回った（図3）。海域別に見ると、道東周辺海域では0.42尾であり、前年（2.62尾）を下回った。道東周辺海域のうち釧路以東では0.16尾であり、前年（0.19尾）並であった。津軽海峡～道南太平洋周辺海域では0.15尾であり、前年（0.88尾）を下回った。三陸周辺海域では漁獲が無く、前年（0.02尾）を下回った。

漁獲物の外套背長組成は、最頻値が21 cmにあったが、16～22 cmまでの分布は扁平な組成であった（前年は22 cmに顕著な山がある単峰型）（図4）。海域別に見ると、道東太平洋海域での最頻値は21 cmで前年（22 cm）並であったが、それより小さい個体（16 cm以上）の割合は前年よりも大きかった。道東太平洋海域のうち釧路以東では最頻値が21 cmにあり、前年（24 cm）より小型であった。津軽海峡～道南太平洋周辺海域での最頻値は16 cmと21 cmにあり、組成の分布は分散していたが、全体的には前年（21 cm）より小型の傾向にあった。三陸周辺海域では漁獲が無かったため、前年との比較はできない（前年は1尾漁獲され、23 cmであった）。

III 各海域の漁況経過

2007年以降の太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）における年間漁獲量*は7万～16万トンで推移していたが、2017年には2.3万トン、2018年には1.7万トンに減少した（図5）。10月～12月に限定した累計漁獲量は、2007年以降5万～10万トンで推移していたが、2016年には9.1千トンに減少し、2018年は7.2千トンであった。主漁場は常磐以北の太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海域に区分される。2018年10月～12月の常磐～三陸海域における漁獲量（生鮮）は4.0千トン、津軽海峡～道南太平洋海域では2.6千トン、道東太平洋海域では0.2千トン、根室海峡～オホーツク海では0.4千トン（図6）、千葉県以南の海域での漁獲量は10トンであった。2013年～2017年の平均に対する比は、常磐～三陸海域では27%、津軽海峡～道南太平洋海域では30%、道東太平洋海域では5%、根室海峡～オホーツク海では3%、千葉県以南の海域では18%であった。

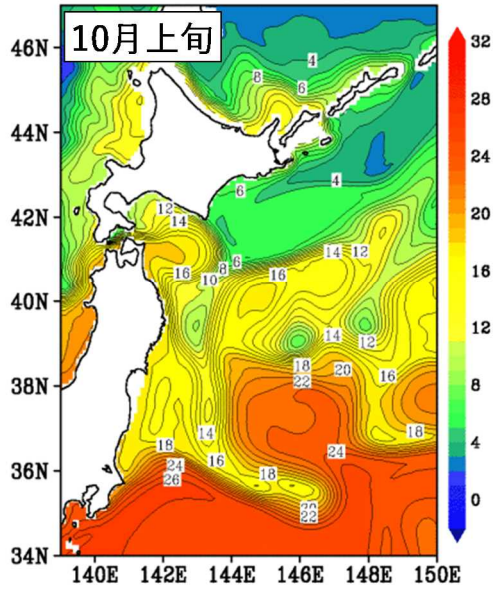
2019年7月～8月の太平洋沿岸域での水揚げ量**（生鮮：速報値、一部未集計）は3.4千トンで、前年（2.9千トン）を上回った。そのうち、常磐～三陸海域の主要港では2.8千トンで、前年（1.4千トン）を上回った。津軽海峡～道南太平洋海域の主要港では0.6千トンで、前年（1.6千トン）を下回った。道東太平洋海域の主要港では49トンで、前年（0.2トン）を上回った。根室海峡～オホーツク海では7月から水揚げがあり、前年を上回っているが、漁獲量は集計中である。千葉県以南の主要港では12トンで、前年（90トン）を下回った。なお、参画道県における代表的な漁況経過を表1に示した。

*主要港漁獲量を漁業・養殖業生産統計年報の漁獲量で引き延ばしているため、図5および図6を含めた漁獲量は全て推定値である。

**水揚げ量は単純積み上げた数値。

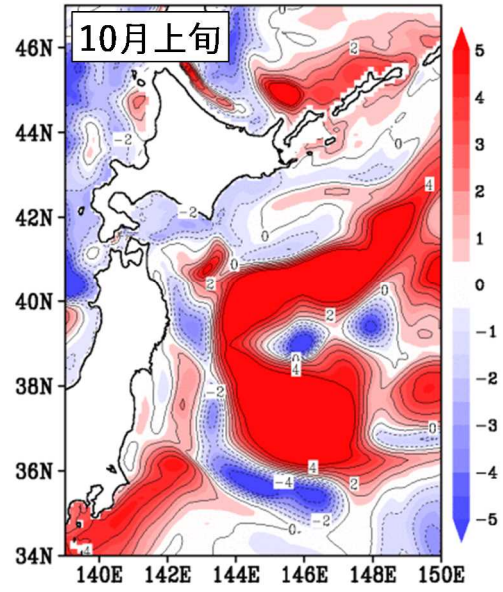
FRA-ROMS

2019/10-early Temperature[°C] (50m)



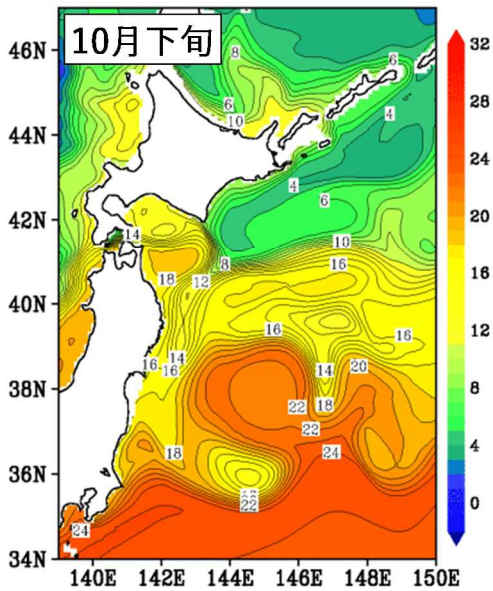
FRA-ROMS

2019/10-early Temp. anomaly(Average year)[°C] (50m)



FRA-ROMS

2019/10-late Temperature[°C] (50m)



FRA-ROMS

2019/10-late Temp. anomaly(Average year)[°C] (50m)

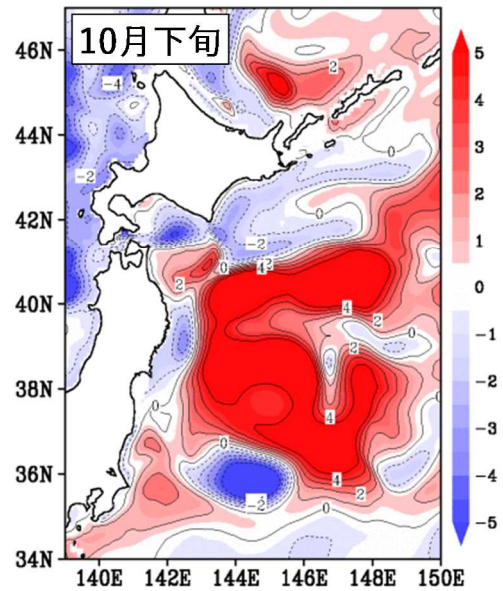


図1. 海況予測システムFRA-ROMSによる2019年10月上旬と下旬の50 m深*予測水温（左図）
および平年差（右図）

右図の青色は平年より水温が冷たい海域を示し、赤色は温かい海域を示す

*スルメイカの代表的な分布深度

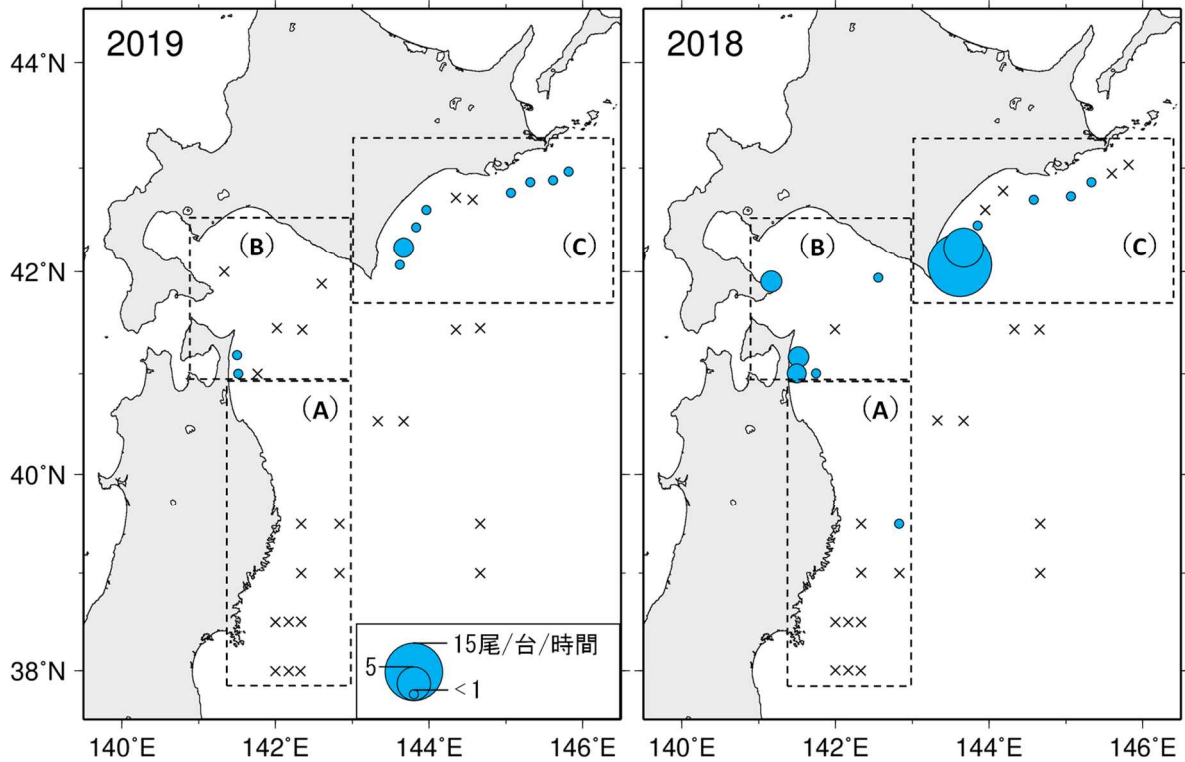


図2. 太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布

2019年8月～9月（左図）、2018年8月～9月（右図）のいか釣りによるスルメイカのCPUE

（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布を左図右下の凡例にしたがって示す（×は漁獲なし）。破線で囲まれた海域は（A）常磐～三陸周辺海域、（B）津軽海峡～道南太平洋海域、（C）道東太平洋海域および根室海峡～オホーツク海域における来遊量予測の根拠となった調査海域を示す

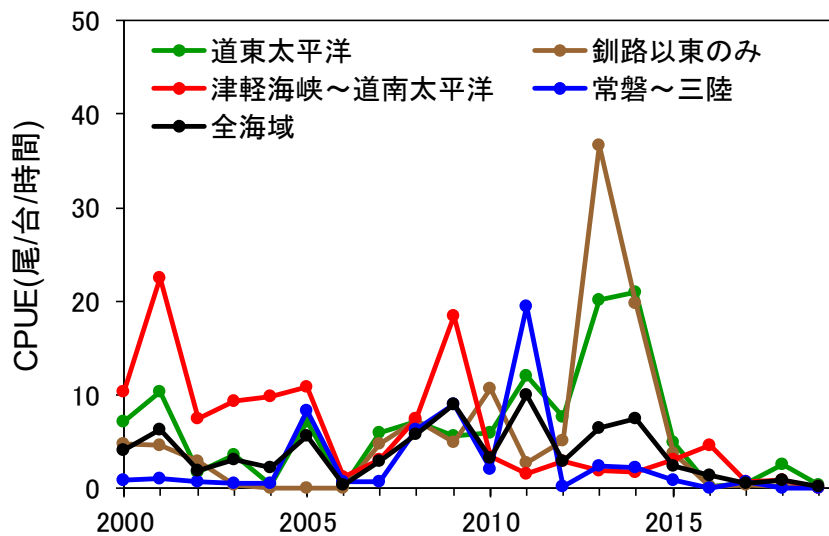


図3. 太平洋におけるいか釣り調査による海域別CPUEの年推移

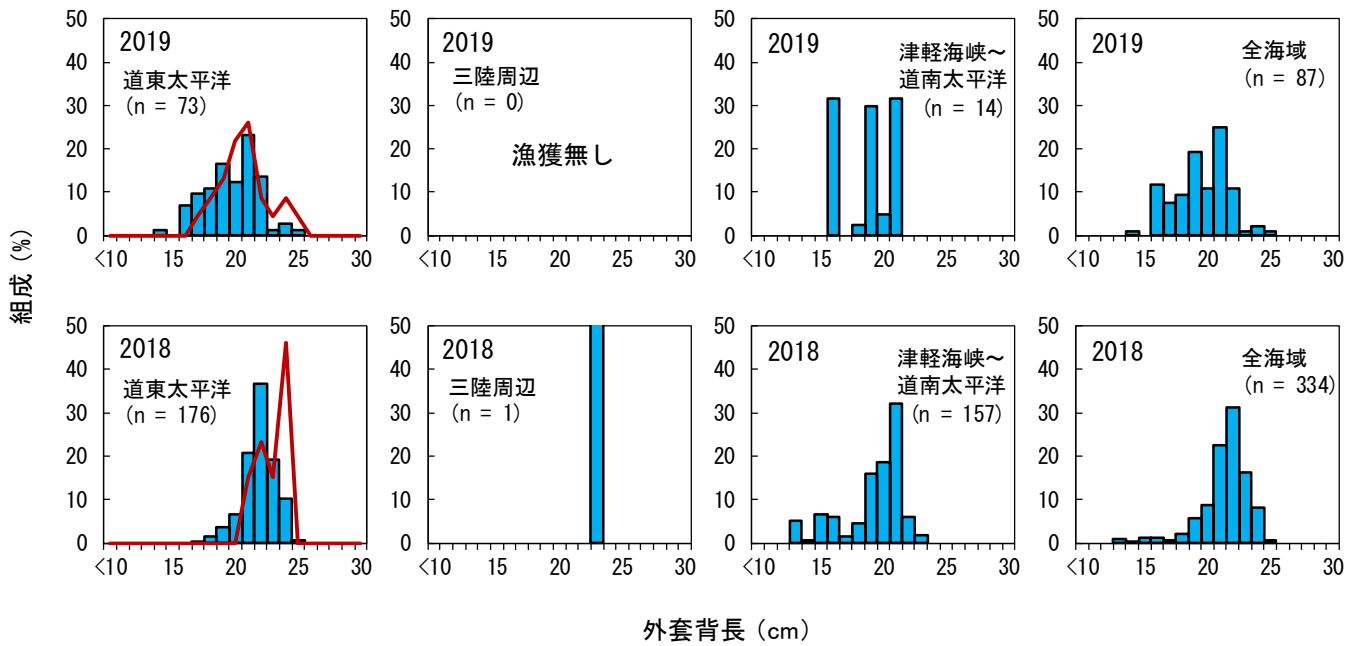


図4. 太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカ外套背長組成の結果

nは測定尾数を示し、最左図の赤線は道東太平洋海域の釧路以東のみの結果を示す

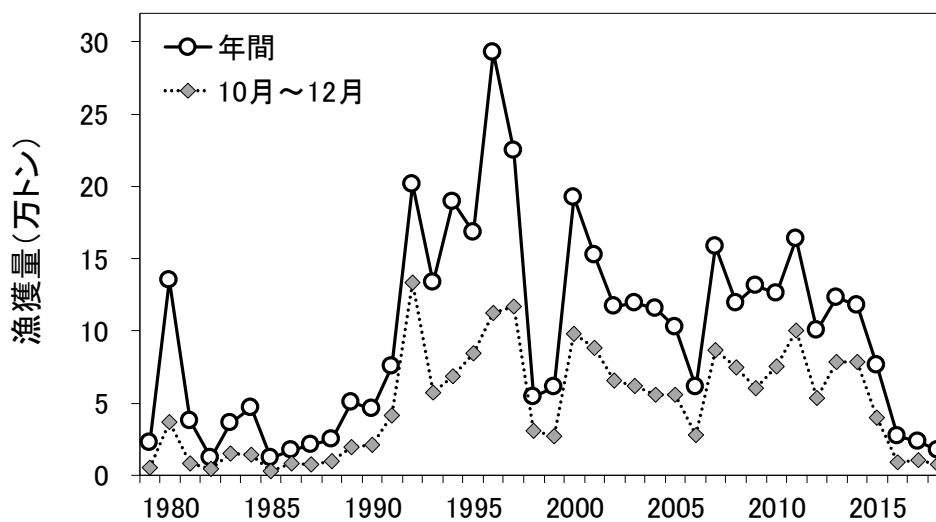


図5. 太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）におけるスルメイカの年間漁獲量（暦年集計）と10月～12月の累計漁獲量の推移

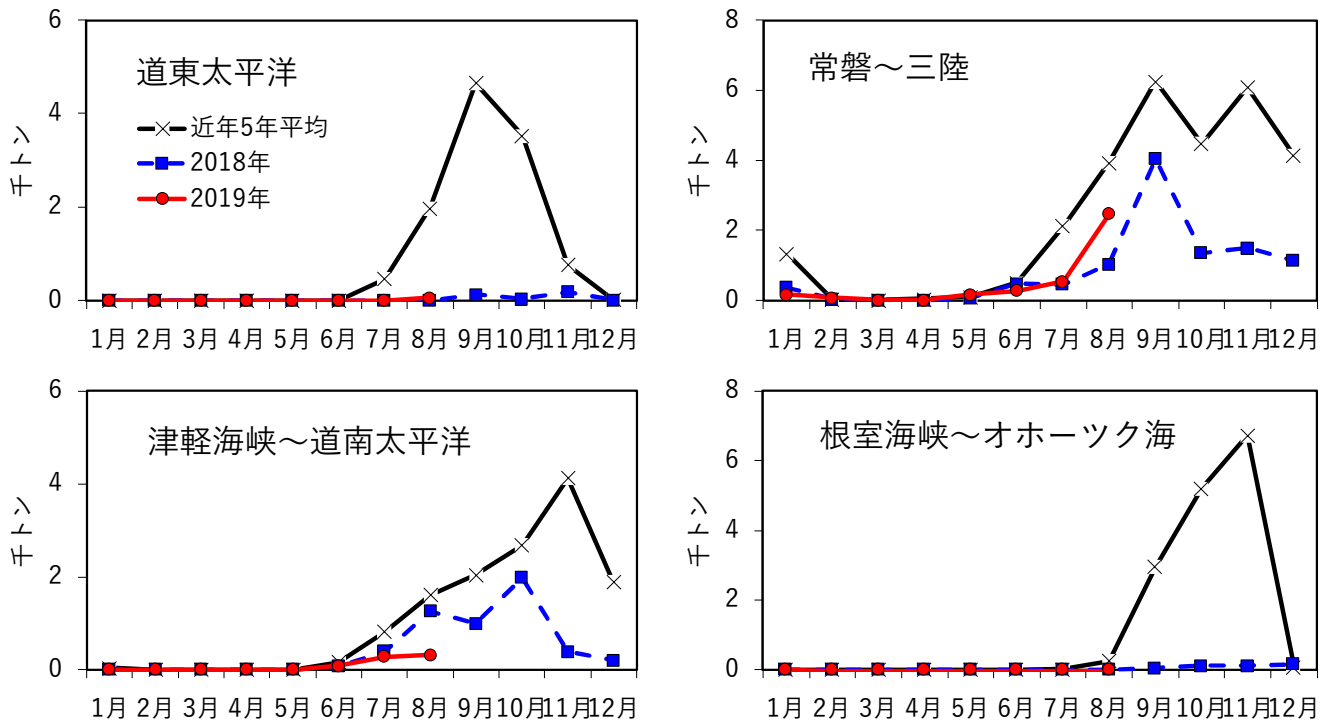


図6. スルメイカの月別海域別の漁獲量（生鮮）
 近年5年平均は2013年～2017年の平均
 （いか釣り・定置網・底びき網・まき網）

表1. 漁況経過（2019年7月～8月、一部9月・未集計・暫定データ含む）

	漁況経過
北海道 道東	<p>本年の初水揚げ日は7月17日（根室港、定置）で、前年（厚岸港で8月6日、釣り）より早かった。太平洋側での初水揚げは7月27日であった（花咲港、釣り）。</p> <p>道東主要港での釣りによる8月の水揚げ量は48トンで前年（0.2トン）を上回り、CPUEは前年比281%であった。9月上旬の概算水揚げ量は24トンで前年（13トン）を上回っている。</p> <p>羅臼港では9月4日から水揚げが始まり（前年は9月24日）、9月17日までの概算水揚げ量は61トンで、既に前年同月の水揚げ量（49トン）を上回っている。</p>
北海道 道南	<p>函館港での釣りによる8月の水揚げ量は31トンで前年比48%、CPUEは前年比47%であった。</p> <p>浦河港では9月17日現在、まだ初水揚げが無い（前年は8月に158トンの水揚げ）。</p> <p>道南主要港での全漁法による8月の水揚げ量は256トンで前年比22%であった。</p>
青森	<p>大畑港での釣りによる8月の水揚げ量は41トンで前年比128%、CPUEは前年比116%であった。</p> <p>白糠港での釣りによる8月の水揚げ量は99トンで前年比312%、CPUEは前年比255%であった。</p> <p>八戸港での釣りによる8月の水揚げ量は532トンで前年比275%、CPUEは前年比132%であった。</p> <p>八戸港でのまき網による8月の水揚げ量は1,410トンで前年比322%であった。</p> <p>八戸港での全漁法による8月の水揚げ量は1,942トンで前年比308%、9月上旬の水揚げ量は983トンで前年比78%であった。</p>
岩手	<p>岩手県主要港での釣りによる8月の水揚げ量は238トンで前年比102%、CPUEは前年比113%であった。定置網による8月の水揚げ量は14トンで前年比36%であった。</p>
宮城	<p>宮城県主要港での釣りによる8月の水揚げ量は0.3トンで前年比7%、CPUEは前年比27%であった。定置網による8月の水揚げ量は1トンで前年比35%であった。底びき網による8月の水揚げ量は15トンで前年比149%であった。</p>
福島	<p>7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。</p>
茨城	<p>7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。</p>
千葉	<p>千葉県主要港での釣りによる8月の水揚げ量は0.9トンで前年比4433%、CPUEは前年比179%であった。定置網による8月の水揚げ量は0.2トンで前年比4166%であった。</p>
神奈川	<p>間口港での釣りによる8月の水揚げ量は0.4トンで前年比116%、CPUEは前年比126%であった。</p>
静岡	<p>仁科港での釣りによる8月の水揚げ量は1トンで前年比58%、CPUEは前年比63%であった。</p>
三重	<p>奈屋浦港でのまき網による8月の水揚げ量は0.1トンで前年比6%であった。</p>
和歌山	<p>すさみ港での釣りによる8月の水揚げ量は0.1トンで前年比1%、CPUEは前年比18%であった。</p>
高知	<p>釣りによる8月の水揚げは無かった（前年は5トン）。</p>

注：CPUEは1日1隻当たり水揚げ量

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	三重県水産研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県水産試験場
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
福島県水産資源研究所	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 北海道区水産研究所 東北区水産研究所 日本海区水産研究所
茨城県水産試験場	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 中央水産研究所
千葉県水産総合研究センター	
神奈川県水産技術センター	
静岡県水産技術研究所	